

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市槇島町千足80

●●●● 考えさせられる辞書 ●●●●

京都文教大学・京都文教短期大学図書館館長
総合社会学部 実践社会学科 教授 (社会学、大衆文化論)

鵜飼 正樹

いきなりだが、次の動作をしてもらいたい。
「〔常に、左右のいずれかの踵を地に着けた状態で〕足を交互に前へ出して、進む」。

どうだろう。雪道をすべってころばないように踏み固めながらそろそろと進むときのような、あるいは、爪先を何かにぶつけて痛みをこらえつつ足を運ぶときのような、何ともぎこちない動きにならないだろうか。

これ、じつは、日本で一番売れている国語辞典、真っ赤な表紙でおなじみの『新明解国語辞典』(山田忠雄 他編 三省堂)の「歩く」の語釈である。だけど、このとおりに「歩く」ことは、かなりむずかしい。すり足だって、いずれかの踵が地から離れる瞬間がある。

引用は、専用ウェブサイトによれば、「深い思索の産物としてのシャープな語釈」による「考える辞書」、「単なる言葉の意味や使い方を知らずにとどまらず、自分の考えを展開する起点となり、深化させる道具となる辞書」をめざした、最新の第8版(2020年)によっているが、私の手元にある第5版(1997年)でも、すでに同様の語釈となっている。

『新明解国語辞典』は、そのあまりにも独創的な語釈が有名で、赤瀬川原平『新解さんの謎』(文藝春秋 1996)や、鈴木マキ子『新解さんの読み方』(リトル・モア 1998)といった本も出されている。しかし、「歩く」の語釈にしたがったら「歩けない」となると、ちょっと困る。

これは、「左右のいずれかの踵」ではなく、「足の裏」とすべきだろう。たとえば競歩には競技規則があり、「競歩とは、両足が同時にグラウンドから離れることなく歩くことをいう」(『陸上競技ルールブック2023年度版』ベースボールマガジン社 2023)と定義されている。そして、両足が同

時にグラウンドから離れると、反則、つまり「走る」と判定されるわけだ。

ちなみに、「競歩」を『新明解国語辞典』で引いてみると、「一定の距離を速く歩く競技。〔一方の足をいつも地面におき、しかもおろした足は一度はかかとまで地面に付けることが要求される〕」とある。こちらは、ぎこちなく歩けそうだ。ただ、「踵」と「かかと」、地面に「着ける」のか「付ける」のか、同じ辞書の中でも表記がゆれているあたりは気になる。

では、「走る」はどうか。「〔人間・鳥獣が〕足で地面を蹴るようにして早く移動する」となっていて、足と地面の接し方が明瞭ではない。私は「歩く」場合でも、足が地面を蹴っているように感じるし、競歩もこの語釈では「走る」になってしまうように思うのだが……。個人的には、「歩く」と「走る」が対比された語釈がほしいところだ。

というわけで、本学図書館にあるコンパクトな国語辞典を調べてみたところ、「歩く」と「走る」を明快に対比させているのは、『岩波国語辞典(第8版)』(西尾実 他編 岩波書店 2019)のみだった。「歩く」は「地面などから両足が同時に離れる瞬間が無いような、足の運び方で、進む」。「走る」は「両足が地面などから同時に離れる瞬間があるような、足の運び方で、速く進む」。こう書いてもらえると、「歩く」と「走る」のちがいは、すぐわかりやすい。

辞書には、引くだけでなく、読む楽しみがある。1冊の辞書で、関連することばを次々と引いて読んでいくのは、とてもおもしろい。私の考えが展開し、深化したかは、よくわからないが、『新明解国語辞典』、いろいろと「考えさせられる辞書」ではある。

(うかい まさき)

🌸🌸🌸 赤ちゃん絵本を“share”するひととき 🌸🌸🌸

幼児教育学科・教授（保育学、発達心理学、保育者養成教育） 松田 千都

みなさんの子どもの頃の記憶の中に、「絵本」はありますか？ その絵本を読んだ時のこと——いつ・どこで・だれと・どのように——を覚えていますか？

私は、京都文教短期大学幼児教育学科で「乳児保育の基本」と「乳児保育の実践」という科目を担当しています。ここでいう乳児保育とは0・1・2歳児の保育を指し、どちらも保育士資格を取得するための必修科目です。この2つの科目では、授業中盤の気分転換として、私が絵本を読む時間を毎回設けています。大学生が絵本を読んでもらう姿なんて、想像しにくい違和感がある…という人もいるのではないのでしょうか。特に幼児教育・保育分野以外の人たちには、そのように感じられるかもしれません。けれども実際のところは、この時間になると教室の中にみんなで絵本の世界を分かち合うような空気が流れ、多くの人が“ほわん”とした笑顔になります。読み手の私の方もゆったり・ほっこりした気分になれる、楽しい大事な時間になっています。

授業のために私が選んでいるのは、「赤ちゃん絵本」と呼ばれる絵本です。赤ちゃん絵本とは、0・1・2歳児を対象とした絵本群を指し、日本独特のジャンルとして世界に誇る豊かさがあると言われています。日本で累計100万部以上発行された絵本は小冊子『ミリオンぶっく』（TOHAN）で毎年紹介されるのですが、2024年版の第1位は、実は赤ちゃん絵本なのです。750万部を超えて発行されているその絵本は、『いないいないばあ』（松谷みよ子/文 瀬川康男/絵 童心社 1967）です。書店ではよく平積みになれているので、目にしたことがある人は少なくないと思いますし、私の授業でも毎年必ず読んでいます。

さて、冒頭でみなさんの記憶の中にある絵本についてお尋ねしましたが、どのような情景が浮かんできたでしょうか。家庭・保育園・幼稚園で、家族・先生・友達と、大人の膝で・先生を囲んで…と、さまざまな場面があることでしょう。みな

さんの生き立ちは十人十色ですが、絵本と一緒に思い出される情景はあたたかなものであってほしいと思っています。

あたたかい絵本のひとときを、すべての赤ちゃんに——ここでは、この願いのもとに行われている「ブックスタート」という活動を紹介します。ブックスタートは、乳幼児健診などの機会に、絵本を開く楽しい「体験」と「絵本」をセットでプレゼントする活動です。その自治体に生まれたすべての赤ちゃんとその保護者が対象で、行政と市民が協働する事業として全国で行われています。2025年1月31日現在、全国1,741自治体のうち、NPOブックスタートを通してブックスタート事業を実施しているのは1,121自治体、絵本の配付のみの事業も含めると1,512自治体となっています。イギリスで始まったこの事業のキャッチフレーズは、“Share books with your baby!”。赤ちゃんにとっての絵本は、読む（read books）ものではなく、読み手と共に楽しむ（share books）ものだというコンセプトです。そのため、絵本だけではなく、絵本と一緒に楽しむ体験をプレゼントし、そのひとときのあたたかさを実感してもらえるような取り組みが大切にされているのです（詳しくは、NPOブックスタートのホームページをご覧ください）。

絵本は、赤ちゃんを育てる家庭にも乳児保育の現場にも欠かせないものです。でも残念なことに、ほとんどの人は、自分が赤ちゃん時代に絵本を読んでもらった場面を思い出すことができません。大学生はもう赤ちゃんではありませんが、乳児保育の授業で絵本と出会う時には、赤ちゃんの気持ちになって、絵本を“share”する心地よさを感じてほしいと思っています。未来の先生たちや未来のお父さん・お母さんたちが、あたたかい絵本のひとときをつくってくれることを願って、これからも赤ちゃん絵本の世界と一緒に楽しんでいこうと思います。

（まつだ ちづ）

🌸 その一行に息を呑む 🌸

総合社会学部 総合社会学科 メディア・社会心理コース4回生 寺田 有希

本を読んでいると、突然、思考を奪われるような一行に出会うことがあります。その一行が、それまでの物語を覆し、世界の見え方を変えます。私にとって本とは、単なる物語ではありません。本の中には無数の言葉が紡がれ、その一つひとつに意味が込められています。ときには、たった一行が私の価値観を覆し、息を呑むほどの衝撃を与えてくれることがあります。何気なく読み流していたはずの言葉が、ある瞬間に突如として輝きを放ち、物語のすべてを変えてしまう。そんな瞬間に出会うたびに、日本語の持つ繊細さと力強さに心を奪われます。

三浦しをんの『舟を編む』(光文社 2011)には、言葉を定義することによって、日本語の奥深さに気付かされます。

「右という言葉の説明できるかい？」

この問いを投げかけられたとき、私は「そんなの簡単だ」と思いました。しかし、いざ説明しようとすると、意外なほど難しいことに気づきます。言葉を言葉で表現するのは、単純なようでいて非常に奥が深く、言葉の持つ曖昧さや多様性に気づきました。「右とは、体を北に向けたとき、東にあたる方」。この定義にたどり着くまでに、『舟を編む』の登場人物である辞書編集者たちは、何度も議論を重ねます。

言葉はただの記号ではなく、そこには人々の思考や歴史、文化が折り重なっています。普段何気なく使っている言葉が、こうして誰かの手によって磨き上げられていることを知ったとき、私は日本語の美しさに改めて心を打たれました。私たちは言葉に囲まれて生きていますが、その奥にある「意味」をどれほど意識しているのでしょうか。

そして、物語の最後の一行によって世界が一変する瞬間も、言葉の美しさを強く実感します。東野圭吾の短編集『素敵な日本人』(光文社 2017)には、そんな「どんでん返し」の余韻が残る物語が詰まっています。一見、何気ない日常の一場面に見えても、最後の一行がすべてをひっくり返し、読者を驚かせます。そして、その驚きのあとには、しみじみとした感慨が押し寄せることもあ

ります。

例えば「水晶の数珠」では、一生に一度だけ過去に戻れるという不思議な力を持つ数珠が登場する。主人公は、それをどう使うべきか思い悩むが、物語の最後で、思いもよらない事実が明かされます。その瞬間、それまでの物語がまるで違う色彩を帯びて見えてきます。最初に読んでいたときとは違う景色が、最後の一行を読んだ瞬間に広がりました。

「どんでん返し」と聞くと、単なるサプライズのように思われるかもしれませんが、しかし、本当に美しいどんでん返しは、決して単なる驚きでは終わりません。その一行が意味することを反芻するうちに、静かな余韻が残るのです。日本語の持つ余白の美しさがあります。

そして、私が最も言葉の魅力を感じるのは、詩を読んでいるときです。詩は、限られた言葉の中に無限の情景や感情を詰め込む芸術です。たった数行の詩の中に、一瞬で心を震わせる一行があります。春の訪れを詠んだ詩を読めば、桜の花びらが風に舞う光景が目の前に広がる。夜の静寂を描いた詩を読めば、言葉の隙間から月明かりが差し込むように感じる。詩は、言葉の持つ力を極限まで研ぎ澄ませた表現であり、その美しさに魅了されずにはられません。また、日本語の詩には、独特の繊細さがあります。例えば俳句や短歌では、わずか十数文字の中に、情景や感情、哲学までも込めることができます。日本語の持つ「余白」の文化によって、言葉を詰め込むのではなく、語られない部分にこそ深い意味が宿ります。

私にとって、日本語は心を揺さぶる魔法です。本を読むことで、新しい言葉と出会い、価値観を広げることができます。たった一行の言葉が、自分の中に深く根を下ろし、世界の見え方を変えてくれます。その力を知っているからこそ、私は言葉を大切に、その美しさに触れ続けたいです。

だからこそ、私は今日もまた、本を開きます。そこには、まだ見ぬ「息を呑む一行」が待っているのです。

(てらだ ゆうき)

♡♡『あなたも誰かのサンタクロース』♡♡

臨床心理学部 臨床心理学科 子ども・青年心理コース3回生 嶋田 響

こんにちは。あるいはこんばんは。前回、第49号に投稿させていただいた嶋田です。

今回は少し季節外れな話題になりますが、お付き合いください。

最近では私たちの生活にインターネットが与える影響はとても大きく、幼少期からYouTubeなどに触れ、育っていく環境が当たり前だと思います。そのことがどのような変化をもたらすのかは分かりませんが、インターネットが無い時代とは確実に違う体験をしながら、成長していきます。

そんなアナログは淘汰されていくと言われる時代ではありますが、特に子どもの頃の「本に触れる」ことが与える影響はまだまだ大きいと思います。

世の中には経済困窮や被災などさまざまな理由で、本を満足に読むことができない人がいます。そのような困難による「読書体験格差」を減らすことを目的とした制度があるのをご存じですか？

その制度は『NPO法人チャリティーサンタ』が2017年スタートした、『ブックサンタ』という社会貢献プロジェクトです。

私は小さい頃から本を読むことが好きで、学校の図書館や市民図書館などで本を借りるのはもちろん、貰ったおこづかいで本を買ったり、プレゼントに本をねだったりと自分の生活の周りには本が溢れていました。そんなこともあり、私は今、本屋さんでアルバイトをしているのですが、アルバイトを始めてからこの制度について知りました。

この制度がどういうものなのか、ブックサンタのホームページに書いてあることを引用します。

「本を贈りたいと思った人が本を買って、チャリティーサンタをはじめとした全国数百のNPOを通じて、子ども達へ本のプレゼントが届きます。」

(引用：<https://booksanta.charity-santa.com/about/>)

仕組みとしては、本屋さんやオンライン書店などで私たちがプレゼントしたいと思う本を選び購入する。そしてその本を預けることで、全国の本を必要としている子どもたちに届きます。ブックサンタは「本を届ける」という形だけではなく、

運営費の寄付やクラウドファンディングなどで寄付金を送るといった形もありますが、私が良いなと思ったのは「本を届ける」という形なので今回はあまり触れないでおきます。

店舗に出向いてのブックサンタと、オンライン書店でのブックサンタの違いとしては、プレゼントしたい本の中身を実際に手に取って見たい方向けの店舗、手軽に参加したい方のオンライン書店のようなイメージです。店舗がこのプロジェクトに参加している必要がある点に注意が必要ですが、個人書店でなければ参加している可能性が高く、参加書店はホームページで確認できるので安心です。

自分で選んだ本を子どもたちに届けられることがいいと思う反面、何を選んでいいか分からないという思いもあると思います。ですが、年齢別のおすすめ本が「小学校低学年向け」「小学校中学年向け」「小学校高学年向け」のようにかなり細かく紹介されている冊子を貰えるので、それを参考に選べます。

個人的におすすめするのは、自分が子どもの時に読んで記憶に残っている本などを選ぶことです。私は当時好きだった本の中から『おばけのアッチ』や『あの子の秘密』を選んで、ブックサンタで送りました。

このように、自分の本を買うついでや思い出を次の世代に繋いでいくためにも、1年に1冊から始めてみませんか？

今回は本の紹介ではなく、本にまつわる体験談のようなものでした。この制度について1人でも多くの人に伝えることが、誰にでもできる「このプロジェクトを応援すること」だと思います。ここではじめて知った方も、このプロジェクトの輪を広げていただけたら嬉しいです。

私はブックサンタの関係者ではありませんが、純粹にとってもいい取り組みだと思ったので、今回「本にまつわるエピソード」として書かせていただきました。

(しまだ ひびき)

☆☆☆ 私のすすめる3冊（私の推薦図書）☆☆☆

幼児教育学科 講師（幼児教育学） 小林 君 江

◎「版画 のはらうた1」

詩 くどうなおこ／版画 ほてはまたかし／童話屋 2014

作者のくどうなおこが草むらでひなたぼっこをしている場面から話は始まる。自然界の生き物や木々、風などが登場し、1年を通して、くどうなおことのお喋りを版画で描いている。主人公は、姓と名で紹介し、ページ毎の会話やつぶやきから自然界の様々な声が聞こえてくる。「おれはかまきり」では、かまきりりゅうじが登場し、かまをふりかざす姿とひまわりの花の版画に勇気もらう。「けっしん」のかぶとてつおは、つよくいきる！でも、ときどきむねのやわらかいところがなきたくなるのね、なんですか？は、てつおの気持ちを理解し難い。会って話を聞いてみたい。

◎「子どもが主体的に動き出すために大人がどうかかわればよいのか」

荒木尚子 著／ベースボールマガジン社 2024

図書館で借りて、一気に読み終えた。しかし、手元に置きたくて購入した程のお気に入りの1冊である。自分の思いを文章化されているところに魅了された。特に、『遊びと学びに境界線はない』の言葉である。現役の幼稚園教育現場で「子どもの遊びは学びが沢山ある」と、保護者や教育関係者に機会があるごとに事例を交えて話をしたが、遊びが学びに繋がることは中々理解され難い。遊びが子どもの何に学びとして結びつくのか、子ども達に与える環境の大切さについて書かれている。教職員を目指す方に是非お勧めしたい。

◎「たいのおかしら」

さくらももこ 著／集英社文庫 2018

沢山のシリーズがある中で、私は自分に何か素敵なことが起こってほしいと、期待を込め、この本を選んだ。気持ちを切り替えたり、暇つぶしに読んだりする時にぴったりの本である。テレビで放映されている漫画と同様、主人公の子ども時代の体験を5～7ページ程度に纏めたストーリーである。気軽に読めるところが良い。読みながら1人で笑い、時にはあるある！と頷くことも多い。イライラしている時にもクールダウンとしての効果があるように思う。ユーモア満載の1冊である。

（こばやし きみえ）